



偵察小隊が
モンドの遺跡で
消息を絶った
報告を聞き

その捜索に来た私を
待ち構えていたのは
見たこともない生物だった

「う……う……」



つ……強い……



……本当にヒルチャール……なの？

あの触手……

だめ……意識が……

こんな……やつ……に……



斬っても斬っても
すぐに再生する……

「く…」

「やめ…っ
どこ触って!!」

気が付くところは
見たこともない場所

周りは触手で
覆われており
嘔せ返るような
匂いと湿度で
充滿していました

触手に拘束されていた
私は何とか脱出を
試みようとする
のですが…

なんて力なの…
ちっとも
振りほどけない…!!

それにこの怪物
少しずつ私の服を
引き裂いて…

「ヒッヒッ」
今宵も良質な胎を二匹
捕らえたようだな

「しかも西風騎士団
遊撃小隊の隊長とは…」

「!？」

アビスの魔術師…!?

「やっぱりこの化け物も
お前たちの
仕業だったのね…」

「こいつは実験で生まれた
新たなビルチャール」

「大した自我はないが
凄まじい生殖能力を持つ」

「生殖ってまさか…」

「お前には「実験体」に
なってもらおう」

私の秘所を守る
最後の一枚を
引き裂く触手

そして私の腕ぐらいの
太さの触手がアソコに
狙いを定めていた

まさか
これって…!!



あれは私の
神の目……!!

「力が使えなくて
困ってるのだろう?」

「裂け……る」

「貴様の胎にだかな!!」

「だめっ!!」

「あぐ……っ!!」

「ヒビヒビと
望み通り
帰してやるぞ」

痛い……っ!!

「太い触手が私の……
膣内に……っ!!」

「嫌あああ……っ!!」



「あっ!!」

「ぐあああああっ!!」

私の膣内を
無理やりこじ開け
最奥を強打してくる
触手たち……

両手両足を
拘束されている私には
それをただ受け止め
続けるしかなかったのです

「やめ…っ!!」

「いたっ裂けるッ
”あ”あああッ!!」

「あ”あ”あ”あああッ!!」

膣内を押し広げ
勢いよく子宮に
体当たりを
してくる触手

あまりの太さに
肉が軋み、苦悶の
声をあげるしか
ありませんでした

「では帰して
やるとしよう」

「お前の大事な
神の目をな」

「ビッビッヒ…」

「さあ、そいつの胎の
中に吐き出せ…」

「まさか本当に
神の目を…」

「やめなさいッ!!」

「いやッーいやあああッ!!」



神の目が...
私の子宮の中に...
入って来てる...っ!!



「成功だ!」

「これで貴様の
神の目を存分に
汚染することが出来る!!」

「いつの子種で
思う存分なあ!!」

その言葉通り、子宮内部の
神の目に向けて
大量の精液を
流し込んできました

一度では無く

何度も

何度も何度も

私の膣内を
押し開きながら
子種を流し込んで
きたのです

精液が私の子宮を
満たす度に

私の中の「女」と

「神の目」が穢されていく

西風騎士団
遊撃小隊の隊長
エウリュアレではなく

敗北した一匹の雌
だったのです

暴力的な行為に
抵抗することすらできず

淫らな声を上げる姿は

何度目かわからない
怪物の射精が
私の子宮に放たれた頃

そこには、未だ
怪物の触手に
もて遊ばれている
私がいまして

「感じるぞ、
お前の胎の中の
神の目が
十分に汚染された
のをな」

「クハハッ」

「間もなく
汚染された神の目が、
貴様の子宮の中で
強制排卵させる」

「卵子に含まれた
元素と融合した
神の目は
新たな命となる」

「そう、新たな
新たな命をだ！」

痣や擦り傷
全身を染める精液
そして膨らんだお腹

「あ……う……」

激しい凌辱に私の心は
折れてしまい

怪物の行為にも
されるがままと
なっていたのです
そして――

私の子宮の中では――

あっさりとして
排卵を許してしまっ
ていました

まるで神の目に引張り
出されるかのように……

卵子は卵管を
通り、神の目のある
子宮内まで降りて
きたのです

そこで行われる
未知の受胎という
絶望――

卵子が神の目の中に
吸い込まれていく――

汚染された神の目は
私に何の力も
貸してはくれず

私の卵子を
吸収し始める

溶けていく卵子

同時に私の体の中の
元素が奪われて
いくのを感じた

「いいぞ、もっと排卵し
元素を捧げ続けろ！」

「貴様の元素を
喰い尽くした時……」

「その時こそ
新しい「力」が
産まれるのだ」

宴は続く……